

## 創造的身体表現活動の保育内容及び方法について ～「リズム運動」を作ることに焦点をあてて～

片山 啓子 光本 弥生 西村 敦子\*

### 表現教育

The Creative Action of Physical Expression by a New Method

Keiko KATAYAMA Yayoi KOMOTO Atsuko NISHIMURA

(2000年11月1日受理)

幼児の自然な表出である「模倣遊び」や「ごっこ遊び」を踏まえて、子どもたち自身が「自分の動き」「自分たちの創った動き」と捉えられるような表現活動（創造的身体表現活動）の保育内容及び方法の作成を目指して、特に「リズム運動」を作る場面に焦点を当てて、その際の指導・援助の意図や留意点を中心に、保育者の関わりや役割、子どもの様子、実践後の課題などをまとめたものである。

#### はじめに

保育現場における幼児の身体表現活動は、「舞踊的表現」と「劇的表現」に大別される。いずれも既成作品の動きの順序や動き方を「保育者が教える」形での活動が主流であり、この活動は、運動会や発表会などの場で「演技を見せる」ための練習として行われることが多い。また、日常の遊びの中で、自然に表出される身近な題材を対象とした「模倣遊び」や「ごっこ遊び」なども幼児期によく行われる身体表現活動である。

これらの身体表現活動をはじめ、幼児期の種々の表現活動がイメージや想像力を豊かにし、個性や感性を伸ばすことによって、子どもの創造性の育成に寄与することは、保育実践や経験を通して様々に語られ、また、表現活動に関する研究文献により数多く紹介されている。

本研究は、幼児の自然な表出である「模倣遊び」や「ごっこ遊び」を踏まえて、子どもたち自身が「自分の動き」「自分たちの創った動き」と捉えられるような表現活動（創造的身体表現活動）の保育内容及び方法の作成を目指して、身体表現・保育方法・保育実践における各分野の担当者が共同で取り組んだものである。

遊びや生活の場で、もっと「生き生きとした子どもの姿」を目指した、保育者主導ではない「子どもが主役」の表現遊びとして、「子どもと保育者が共に創る」踊りや劇の制作過程の中より、本稿では、「模倣遊び」や「動きのスケッチ」を経て、特に踊りの構成要素である「リズム運動」を作る場面に焦点を当てて、その際の指導・援助の意図や内容・方法を中心に、保育者の関わりや役割、子どもの様子、実践上の課題などをまとめた。

\*神郷町立新郷保育園

## Ⅰ. 研究の目的と方法

### 1. 研究の目的

片山(1996)の作成した「舞踊創作を中心とした幼児の創造的身体表現のための基本的構想」をもとに実践した様々な題材による創造的身体表現活動に共通する展開パターンを抽出し、幼児の「リズム運動づくり」における保育内容及び方法の原則を導き出すことを目的とする。

### 2. 研究の方法

1996年12月～1999年2月までの期間、K保育所の5.6歳児クラス(12名)における表現活動時の子どもの様子と保育者の働きかけをビデオカメラで録画し、その録画記録を主な分析対象とし研究を行った。

撮影開始当初は、ビデオ撮影に対する抵抗や過剰な興味によって自然な姿の収録には困難さも見えたが、本研究の分析対象となっている場面の記録時には、ビデオ撮影を意識する姿はほとんどみられない。撮影者は保育所に勤務している職員がおこなっている。

分析視点は次2点である。

- 1) 模倣からリズム運動をつくる活動へ移行していく保育活動の展開法について。
- 2) どのような保育者の指導言が「リズム運動」へと導いているのか。

1) については、舞踊論における創作技法を指標としながら、さまざまな題材に共通する展開パターンを抽出し、幼児の「リズム運動づくり」における展開法の原則を導き出すことを目的としているため、それぞれの保育活動場面を時間軸で繋げながら広角的な分析をおこなっている。(Ⅱ章)

2) については、場面分析法を用いながら、分析対象を録画されている保育者と子どもの談話(発話のやりとり)に限定し分析をおこなった。(Ⅲ章)

## Ⅱ. 創造的身体表現活動の展開

以下に示した(表-1)～(表-3)の創造的

身体表現活動の展開例は、各題材とも一連の創作段階を連続して実施したわけではなく、数日あるいは数週間にわたり断続的に取り組んだ実践で、その中の作品創作に直接かかわっていると思われる場面だけを抽出して提示したものである。

なお、以下3つの展開例はすべて5・6歳児を対象としている。実際の活動は、1～6歳児を対象として行ったが、その実践結果から、子どもたちが「自分たちの作った動き」と捉えられて意図的な創作活動ができたのは、5・6歳児のクラスと判断したからである。

## Ⅲ. 指導方法についての検討—保育者の指導言の分析—

### 1. 分析対象の焦点化とその分析視点について

本研究では、子ども達自身が「自分の動き」「自分たちが創った動き」と感じ取ることのできる「表現」活動(創造的身体表現活動)をつくりだすことを実践的課題としている。実践的には、いわゆる子どもの主体的活動をいかに発展させ、そこに子ども達自身の達成感、自己充実感を成立させるかが大きな課題となってきた。

このような観点から保育実践を分析した場合、子どもたちの創造的身体表現活動の展開において、幾つかの課題が明らかとなってきた。その中でも最も大きな実践的課題として提示されてきたのが、即興的な模倣表現から「リズム運動づくり」へ如何に展開させていくか、その保育者の指導方法であった。(図1における(「動きのスケッチ」)から(「リズム運動」)への移行)

即興的な模倣段階において十分に高められた子ども達の表現活動へのモチベーションは、「リズム運動づくり」における保育者の働きかけ如何により消失したり、または高まったりなどの種々の様相を見せる。

それには、主に2つの理由が考えられる。一つには、それまでの即興的模倣段階に比べ、個の単独の活動から子どもたち相互の共同作業的な色合いが濃くなる。そのため一人一人の思いを尊重しモチベーションを維持するための保育者の介入場面が量的に増えざるをえないこと。二つには、

(表-1) (1)題材「ねこ」：5・6歳児

創作段階	保育者の意図・言葉がけの内容	子どもの様子や言葉
<p>「模倣遊び」 (一人一人、 即興的に動く)</p>	<p>○「ねこ」になって遊ぶ。 (様々な場面を想定して、言葉がけ 例：ひなたぼっこ・お散歩・けんか等)</p> <p>○ねこの動きや形、鳴き声などの特徴 を改めて聞き、前よりもっと「ねこ」 らしく動けるようにする。</p> <p>○子どもの動きを見ながら、保育者も 一緒に、楽しそうに動く。</p>	<p>○ねこになったつもりで 四つ足で楽しそうに動いて いるが、動きの種類が少なく 単調。</p> <p>○動きも交えて、「ゆっくり 歩く」「ジャンプ」、粘っ た感じで「ニャ〜オ」等々、 活発に口々に発言。</p>
<p>「動きのスケッチ」 (題材の特徴をより はっきりさせる)</p>	<p>○特徴をよくとらえている子どもの動き をみんなに見せて、おもしろい動きを 工夫することを意識させる。</p> <p>○みんなで同じように動いてみる。</p> <p>○前と違う動きを工夫する。 (以上を繰り返す)</p>	<p>○見て、自分もやってみよ うとすぐまねをしている子 もいる。</p> <p>○「先生、見て見て」と 競って見せたがるように なる。</p>
<p>「リズム運動」 (踊りらしいリズム の感じられる動き をみんなで出し合 って決める)</p>	<p>○「動きのスケッチ」で出した動きや動作 をもとに、リズム運動を作る。 (オーバーに動く・動きにアクセント をつける・動きをカウントする等)</p> <p>○保育者がヒントを与えたり、動きを 例示して、取り組みやすくする。</p> <p>○子どもたちが「みんなで作った踊り」 と感じられるように楽しい雰囲気 作りに心掛ける。</p> <p>○一連のリズムパターンができれば、 繰り返し練習する。</p> <p>○動きの雰囲気に合う伴奏音楽(歌付き) をみんなで探す。</p>	<p>○個々の動きの中から、み んなで相談して、3種類の 動きにリズムをつけること にする。</p> <p>○自分の動きが採用されな くて、残念がる子どもも いる。</p> <p>○伴奏音楽がつくと踊りや すくなり、次の動きのアイ ディアが出たり、今の動 きに変化を加えている。</p>

(表-2) (2)題材「ロケット」：5・6歳児

創作段階	保育者の意図・言葉がけの内容	子どもの様子や言葉
<p>「動きのスケッチ」①                      (曲をよく聞かせ、踊りのイメージ作りをする)</p>	<p>○ロケットの踊りを考えて遊ぶ。                      「ぼくらの宇宙旅行」を歌ったり、ロケットがどう発射するのか話し合う。                      (ロケットの形・発射の様子など)</p>	<p>○発射の合図で飛びあがったり、手をつないで丸くなっている。                      ○ロケットの本体、羽根について話し合う。</p>
<p>「動きのスケッチ」②                      (曲の感じや歌詞で区切って考える)</p>	<p>○出来上がった形になり、曲に合わせて動きを作っていく。                      ○発射の合図で飛跳ねるようにし、どのように跳んだらよいか、子どもの動きを引き出すようにする。</p>	<p>○発射の合図で跳ぶようにしたが、「手を大きく振った方がいいよ」「この次は回ったらどう」などいろいろな動きが出てきた。</p>
<p>「リズム運動」①                      (グループで考え合い動きを揃えて踊ってみる)</p>	<p>○からだの部分は跳んで回るようにし、4人でその動きを合わせるようにする。(4回飛んで回る)                      ○羽根の部分は床の上に寝転び、足の上げ下げでロケットが飛んでいる様子を表すようにする。                      ○動きが大きくなるように言葉がけをする。                      ○揃えることも動きを大きく見せるために必要なので、繰り返し練習する。</p>	<p>○保育者がまとめなくても、子ども達だけで決めて踊る姿が見られた。                      ○揃えやすくするために自然に歌いながら踊っている。</p>
<p>「リズム運動」②                      (動きの順番やリズムパターンを決めて踊りを完成させる)</p>	<p>○発射・飛行・着陸などの雰囲気かわかる構成になるよう子ども達から出てくる動きを取り上げ、まとめていくようにする。                      ○同じ動きだけでなく、他の動きとの組み合わせを考え合い、曲に合った動きを作るようにする。                      ○保育者は自分の考えた構成を一応もっているが、子どもの考えを取り上げ、一緒にまとめていくようにする。</p>	<p>○「発射したら羽根が動くよ、手も動かそう」と言い、手を上げたり下げたりする。                      ○良い考えが出たら「それがいい、やってみよう」と言い合い踊っている。                      ○「もっと練習しよう」と自ら進んでするようになる。</p>

(表-3) (3)題材「ロボット」：5・6歳児

創作段階	保育者の意図・言葉がけの内容	子どもの様子と言葉
<p>「リズム運動」①                      (題材を示すとすぐ踊りらしい動きが出るようになるが、子どもの持っているイメージをさらに引き出すようにする)</p>	<p>○言葉に合わせて動いてみる。                      (ゆっくり動く、手と足を大きく動かす。)</p> <p>○同じ動きが多いので、「かわいいロボット・強いロボットがいるかも」と言葉がけ、子どもに動きを出させるようにする。</p>	<p>○カキーン、コキーンガガガーと音を出しながら、手を上下して歩く。</p> <p>○「かわいいロボットは背が低い・強いロボットは太いよ」などいいながらイメージ作りはできるものの、実際には動きがあまり出てこない。</p> <p>○かわいいロボットは出るのが強い動きが出てこない。</p>
<p>「リズム運動」②                      (子どもが出した動きの種類を増やしたり変化・発展させる)</p>	<p>○保育者が強いロボットになって動いてみせ、子ども達にさせてみる。</p> <p>○保育者と違った動きをする子や大きな動きをする子を取り上げ、みんなに見せる。</p>	<p>○保育者の動きを喜んでいます。</p> <p>○しだいに個々に動きを出してくる。「背が低いからしゃがんで歩こう」「元気がいいから手を大きく振ろう」など。</p>
<p>「リズム運動」③                      (グループに分かれて動きを決める)</p> <p>「衣装作り」</p>	<p>○2組に分かれて動きを決めていくようにする。(かわいい動き、強い動き)</p> <p>○伴奏音がなかったので動きにくかったが、カウントをとることで動きの長さは決めやすくなった。</p> <p>○出てきた動きを一緒に決めていき、歩く・回る・上下するなどの動きを組み合わせ運動にリズムをつける。</p> <p>○衣装について話し合い、頭の形・色などを子どもたちが決め、一緒に作るようにする。</p>	<p>○なりたいロボットなので考えも出しやすいようで、細かい動きも出てくるようになった。「手を小さく振って回ろう」「速く歩こう」など。</p> <p>○衣装をつけることによって意欲的になった。金銀の紙を貼ったり、アンテナをつけたりしてロボットになりきっていた。</p>

「リズム運動づくり」は活動の持続性が求められる。その場面その場面で消失していく即興表現とは異なり、表現自体の積み上げと高まりが求められるのである。そのため活動と活動をつなげていく保育者の系統的な指導が表現活動の要となっていること、である。

また、子ども達の主体的な活動については教材・環境構成等、様々な視点からの研究がなされているが、創造的身体表現活動においては、保育実践者自身の経験知識が他の領域に比べて非常に少ないこともあり、保育者の指導性については十分な検討が加えられていないのが現状である。

そこで、本研究では即興的な模倣表現からリズム運動への移行における指導方法、主に直接的な指導言について検討を行い、創造的身体表現活動を展開させる指導方法の一助としたいと考えている。

分析方法としては、ビデオに録画された保育実践を、実践している保育者とともに視聴しながら、リズム運動をつくっていると思われる場面を抽出し、どのような指導言が子どもの活動を「リズム運動」へと誘導しているかについて考察を行った。したがって、ここでは「リズム運動をつくっている」という保育者および子どもの意図の有無に関わらず、模倣から「リズム運動」への展開または動きが固定化し発展している箇所を対象としている。

## 2. 保育場面

C：子どもの発話 H：保育者の発話  
( )：場面状況、子どもの表情等

### 〈保育場面記録①〉

日時：1996年12月

場所：遊戯室

5・6歳児23名がジェットコースターになって遊園地ごっこを楽しんでいる場面

(子ども達が縦に一列になり、前の子どもの肩に手をかけて並んでいる。)

C1：出発しますよ。シートベルトをつけて下さい。(大きな声で叫んでいる)  
(列の後半がなかなか並べない)

C1：出発します。

(走りはじめようとする)

H：ゴトン、ゴトン、ゴトン、ゴトン

C1：ゴトン、ゴトン、ゴトン

(動きがゆっくりとなり、しゃがみはじめる)

(C1に続きながら、子ども達の動きに統一性がでてくる。)

### 〈保育場面記録②〉

日時：1998年8月

場所：遊戯室

5歳児17名が忍者になりきり、保育者の出す音(太鼓等)にあわせて表現し、手裏剣を投げる動きをしている。保育者も手裏剣の動きを引き出そうとしている場面。

H：ドーン(太鼓の音)

C：(それぞれの形で跳び上がり、手裏剣を投げる動きをする)

——数回繰り返す——

H：ねえ、ねえ、いま先生見てたらね。こうしといて(小さく蹲るようにしゃがむ)ぱーんと跳び上がる時に手裏剣を投げてる人がおったよ。おもしろいよね。遠くに手裏剣が飛んでいったように見えたよ。

H：C1ちゃんやってみて

C1：(小さく蹲り、跳び上がって、投げる)

H：みんなもやってみる?

C：やってみる!(それぞれ、跳びあがって手裏剣を投げる)

H：(太鼓をそれにあわせて叩く)

C2：僕のも遠くに投げるぞ。

### 〈保育場面記録③〉

日時：1999年1月

場所：遊戯室

4・5歳児12名がロボットの動きを出し合っている場面。子ども達はそれぞれ自由に思い思いのロボットになって遊んでいる。

H：Aちゃんのロボットはかわいいロボットだね。

H：ねえ、みんなかわいいロボットってどんな風に動くと思う？  
 C1：こんなふう…。(しゃがんだまま小刻みに前進する)  
 C：(何人かの子ども達が真似をして動き始める)  
 H：じゃあ、強いロボットになった人いる？  
 C：(数人のこどもが力強く足音をならしながら歩き始める)  
 H：強いロボットになった人手を上げて？  
 C：(手を上げる)  
 H：かわいいロボットになりたい人は？  
 C：(手を上げる)  
 H：そしたら、これからどんな風にしたら「強く」見えるか。どんな風にしたら「かわいく」見えるかをみんなで相談してみよう。  
 C：(二つのグループに分かれて話し合いを始める)  
 C1：こうするとかわいいでしょう？(しゃがんだまま小刻みに動く)  
 C2：ちょこちょこって感じだね。  
 C3：……(C1の真似をして動く)  
 C2：手はこうしたらいいよね。(ひじを曲げて指先を伸ばして前後に振る)  
 C：(C2の真似を試みる)  
 C1：こう？こう？(C2の提案を受けて動く)

### 3. 考察

保育場面記録①は、子ども達がみんなで動きを揃えて遊ぶ中で、自然に出来上がったリズムを共有し、その繰り返しの中で決まったリズムパターンができていった事例である。

一人一人が遊園地の乗り物をイメージし、表現遊びを楽しむなかで、ジェットコースターの長い車体をイメージしてかC1をリーダーとし子ども達が連なって遊びは始める。しかし、連なっているが動きがそろわないため、ジェットコースターがうまく作動していなかった。

ここでの課題は動きをそろえることにあったのだが、保育者は「そろえましょう」とカウントを

取る代わりに、「ガタン・ゴトン、ガタン・ゴトン」という擬音を、はじめはゆっくりとそして次第に早く子ども達の動きにそえるように提示している。保育者の添えた擬音とそのリズムにより、子ども達のジェットコースターの動きには統一感が生まれ、それによってジェットコースター遊びにはスリル感とみんなで共有できる動きの面白さが加わることとなった。

この場面を契機に、保育者がいない場面でもジェットコースター遊びは繰り返し行われ、「ゆっくりと動き初め、次第に早くなる」という動きのリズムが固定されていった。5歳児は、劇づくりの中でのジェットコースター場面に同様の動きをあてはめている。

保育場面記録②は、子ども達それぞれの手裏剣を投げる動きの中から、リズムが感じられる動きを保育者が取り出していった場面である。

忍者になりきっての表現遊びを楽しむ中で、手裏剣を投げる動きは、胸のところで手を横に合わせて、一方の手をすばやく前後に動かす動きが主流であり、どちらかといえば動きが単一化する傾向にあった。

ここでは、保育者は小さくうずくまって跳びあがる子どもの動きを取り上げ、その動きの独自性を評価している。人とは違う動きを取り上げることで、子ども達の中に単一化しつつあった手裏剣を投げる動きが多様化し、ただ投げるだけでなく「くずくまるー跳びあがるー投げる」という具合に複雑になっていっている。その後、その動きに太鼓のリズムを重ねることによって、より踊りらしい動きが出来上がっていったのである。保育者は、踊りらしい動きという視点から「くずくまるー跳びあがるー投げる」という動きを取り上げたわけではなかったが、リズムのある動きを取り上げたことによって、子ども達の活動を「リズム運動」へと無理なく誘導していくこととなった。

もう一点注目すべきは、保育者は「手裏剣が遠くに飛んでいった」というように子ども達の手裏剣を投げるイメージに新たなストーリーを織り込んでいっている点である。それによって、どんな風に見えるかを子ども達が意識するようになり、その後、遠くに投げる時の動きは跳び上がって投

げる、速くたくさん投げるときは何度も手をすばやく動かして投げるなど、動きの意味合いが共有されるようになっていったのである。

保育場面記録③は、子ども達がイメージを話し合い、それぞれの思いを重ね合わせることによって、そのイメージにあった動きがつくられていった事例である。

ここでは、保育者は子どもの動きに意味をもたせていき、さらに話し合いによって、その意味にあった動きを複数で考えあう場を設けている。ここでは「どう動きたいか」ではなく「どう見えるか」が問題とされていく。そのためには、子ども達は自分の動きを客観的に見る作業を行うことになる。この場面では、C1は他の子どもにどのように見えるかを問いながら、また他の子ども達はどのように見えるかを応えながらその複雑な作業をこなしていつている。

この「どう見えるか」の視点を子ども達が共有し、「どう見えるか」が共同作業になったとき、それぞれの意見を重ねながら動きはより「〇〇らしく見えるように」高まっていくこととなる。

上記①～③の事例より、即興的な模倣表現からリズム運動への移行における指導方法のポイントについて、大きくは次の3つが提示できるように思われる。

- 1) 子どものイメージの世界を壊さないように保育者がその世界を共有すること。
- 2) 表現する動きに意味を持たせることによって、一人一人が持っているイメージの世界を子ども達が共有できるようにすること。
- 3) 子ども達が自分の動きを客観的に見つめる「内にある外の目」を持てるような機会をできるだけたくさん作ること。

1) は、子ども達のイメージを共有し、そのイメージを楽しみながら新しい意味を織り込んでいくことで、イメージの世界を広げたり、または焦点化することの重要性を示しているものと思われる。

2) は、それぞれが独自に自分の世界だけで行なっている動きは、その時々により多様に変化していくが、動きに共有できる意味が付け加えられることによって、その動きはメッセージ性を持つこと

になり、それは、子ども達が自分の世界とともに外の世界を持つことを意味しているものと思われる。

3) は、事例③においては共同作業という方法で進められているが、他には自分の姿を鏡やビデオで見る、人の動きに対して感想を言うといった場面でも、子ども達は「外の目」を形成していき、「外の目」を作ることで初めて、自分の動きをより高めていこうという思いが作られていくものと思われる。

以上のように、今回の保育実践をみると、「リズム運動」への展開においては、「共有」を基礎とした共同化と客観化の要素を織り交ぜることが重要であるのではないかと考えている。

#### IV. 創造的身体表現活動の展開パターンとその原則

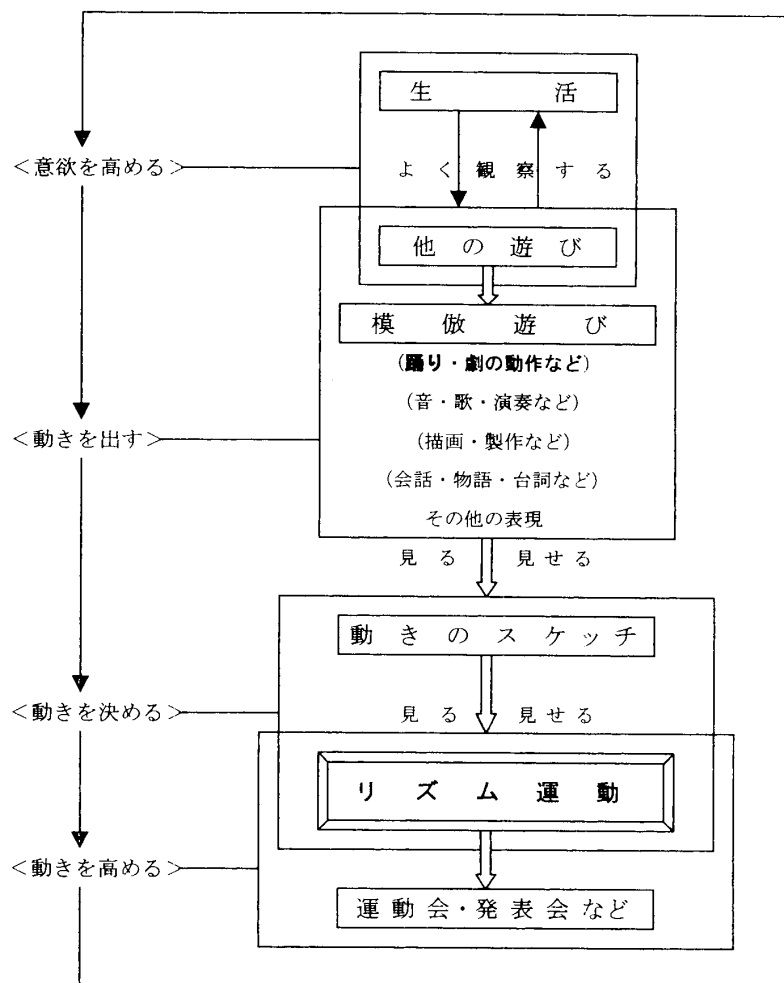
創造的身体表現活動の実践をもとに、「リズム運動」を作り、子供たちの創った作品として仕上げるための展開パターン(図-1)と、〈意識を高める〉〈動きを出す〉〈動きを作る〉〈動きを高める〉のそれぞれの保育場面における指導・援助についての原則を示した。

##### 〈意識を高める〉

遊びや生活の中での子どもたちの多様な実践や体験は、身体表現に限らず他の様々な創造的表現活動を展開していく上での最も大切な基礎的段階である。子どもたちは、多様な実践や体験を通して身の回りで起こった、あるいは感じた出来事・物事・現象などをその発達段階での子どもたちなりの捉え方で把握していく。

そもそも保育や教育における表現活動の目的は、表現技術の上達そのものにあるのではなく、あらゆる表現段階を通しての感性や創造性の育成にある。様々な事象に触れ、ものの見方や感じ方、ひいては価値観や考え方、さらに長じては思想までもを言葉や身体活動(歌う・弾く・描く・動く等々)などの媒体により、独自の方法で表現する活動である。保育であれ幼児教育であれ、その目的を見失ってはならないことは言うまでもなく、幼児期における表現活動が、生涯にわたる自





(図一) 幼児の創造的身体表現活動の展開パターン

己表現行動や芸術表現活動の第一歩を担う位置付けであるとの自覚を、保育者はより深める必要がある。

その意味で、子どもたちの日常の生活や遊びを表現活動に繋げていこうとする視点は重要である。造形・音楽・動き・言葉などどのような表現にしる保育者が創造的表現活動を視野に入れた実践を展開しようとするときは、題材となる対象を「よく観察する」こと（「見る」「見つめる」という行為だけでなく、「感じる」ことも含めて）が、子どもたちの意欲や関心を高めていく。また、充実した創造的表現活動の繰り返しが、周りを「よく観察する」ことのおもしろさに気付かせ、次の創造的表現活動への意欲を高めることも筆者らは度々経験している。つまり、創造的表現活動にとって対象の観察は不可欠であり、創造的

表現活動の経験は対象の観察をさらに広く深くするということである。

身体表現活動に限って言えば、幼児の自然な表出である「まね」も、動き作りの入り口としての「模倣遊び」も、題材となる対象を幼児なりによく観察しなければ成り立たない。そして、動き作りをよく経験している子どもは、身体表現の題材にするしないに関わらず様々な対象をよく観察するようになるのである。

#### <動きを出す>

動き作りの入り口は「模倣遊び」である。模倣には、目の前にモデルとなる対象が存在しているそのまねをする場合と、目の前に存在はしないがそのモデルとなる対象を再現する場合とがある。後者を表象的模倣と呼び、イメージや表象形成に関わる身体表現活動の基盤ともなり、幼児には重

要な発達段階の一つと言われている。この表象的模倣行動は2歳後半頃から発現し、幼児の「ごっこ遊び」などはこの典型と言えよう。

「模倣遊び」は動きによるものだけではない。子どもたちは例えば、聞いた音や言葉をまねること、見た物を模写すること、さらには触れて感じたこと・匂ったこと・味わったことなど五感を通して受け取り印象に残ったあらゆる感情や感覚を、全身の様々な表現（表出）手段を用いて模倣する。この時期の子どもに大人のような分化された表現活動を強いる必要はない。しかし、いずれ分化されるであろう表現活動の入り口として、様々な「模倣遊び」にもっと大きな意義付けは必要である。

生活や遊びの中でよく観察された対象が「模倣遊び」の題材となり、この「模倣遊び」を通して子どもたちは自身の持つ動きの幅を広げながら、身体能力の発達とともに新しい動きを獲得していく。新しい動きの獲得は、子どものイメージをさらに広げ、そのイメージがまた、子どもにとってはより高度な動作やリズム運動を生み出すのである。例えスキップやツーステップというような大人にとっては何でもないありふれた既成のステップでも、模倣遊びの中で子どもたち自身のイメージから出てきた動きであれば立派な創造的身体表現と言えよう。

この段階での保育者の役割としては、次のような内容があげられる。

- 1) 動きが出やすい題材を子どもと一緒に選ぶこと。
- 2) 子どもが出した動きを尊重しながら、その動きが題材の持つイメージにより近づけるような援助や技術指導をすること。
- 3) 出した動きを「見る・見せる」場を様々な方法で出来るだけ数多く設定すること。

1) については、日頃からの表現活動を視野に入れた遊びや環境作りが大切である。

2) についての具体的な援助例としては、言葉がけ・子どもとの話し合い・題材の観察などが、また技術指導の例としては、動きの速さや大きさ・手足の位置や動かし方へのアドバイスなどがある。保育場面記録①の事例が、子どもたちの出

した動きに保育者が擬音を発することにより「ジェットコースター」らしい速さやリズムで遊びを展開するようになった適切な援助の例として挙げられる。また、保育場面記録②は、単一な「手裏剣投げ」の動きにジャンプを組み合わせた子どもの動きをよい例として取り上げたり、太鼓を伴奏音に採り入れるなど、子どもたちが題材の持つスピード感や迫力を感じ、もっと高く跳ぶための、もっと素早く投げるための技術の工夫や練習に自ら取り組むような遊びの展開にしている適切な例として挙げられる。保育者が動いて見せるのもよく行われる技術指導の一つであるが、この方法は、保育者の動きを見た子どもたちが「こんな風に動いてみたい」と思わなければ逆効果になることもある。

3) は、人前で動くこと、鏡の前で動くこと、ビデオ撮影すること等々、人に見せる、人を見る、自分の見るなどの機会を多く設けるほど照れや恥ずかしさがなくなり、次の活動への意欲や関心が高まるのはもちろんであるが、「見る・見せる」行為は、題材の持つイメージや自分の出した動きを客観視することに繋がり、自分の出した動きを客観視することは、リズム運動（踊り）を作るための舞踏的イメージの創出にとって欠くことの出来ない要素でもある。本研究ではあらゆる創作過程において、上記のような様々な方法を用いて「見る・見せる」場を出来る限り設定し、子どもたちが「自分たちの作った動き」を客観的に評価できるよう心がけた。

#### 〈動きを決める〉

「リズム運動」を作るためには、その前段階である「動きのスケッチ」は欠くことのできない創作過程である。「動きのスケッチ」の目的は、題材となる対象の最もその題材らしいところを見つけて（感じて）、それを動きで表わすことである。「模倣」の一種とも言えるが、外形を真似ることが主である「模倣」よりも、その題材に対する作者の思いや感じ方、考え方を動きで表わそうとするのが「動きのスケッチ」である。

「ネコ」という同じ題材でも、それぞれの子どもによりその感じ方は異なる。「可愛い」と感じる子どももいれば「怖い」と感じる子どももい

る。「うちの猫は強い」と思う子もいるし、「隣の猫は憎らしい」と思う子もいるかもしれない。表わすのは同じ「ネコ」の動きでも、その作者であるそれぞれの子どもにより動きに内包されるイメージは異なり、その独自のイメージを様々な「ネコ」の動きで表わそうとすることが「動きのスケッチ」の目的である。「可愛いネコ」には「可愛いネコ」の、「強いネコ」には「強いネコ」の運動の形とリズムがある。それをその子ども（作者）独自の運動で表わすことが創造的身体表現活動なのである。

「模倣遊び」や「動きのスケッチ」を通して磨かれた題材に対する見方や感じ方が「リズム運動」の独創性を左右することになる。保育場面記録③は、同じ「ロボット」の動きでも保育者には「可愛いロボット」に見える動きに注目させ、そこから「強いロボット」も導き出すことにより動きの独自性や多様性に着目させようとしているところである。

「模倣」や「動きのスケッチ」は、題材から最も強く感じたり印象に残ったことを即興的に、あるいは運動としてのまとまりを持たずに表わすことも構わないが、「リズム運動」は文字通り、「リズムを持った運動」であり「リズムの感じられる運動」つまり「踊り」のことである。「模倣」・「動きのスケッチ」・「リズム運動」の定義や境目を特に明確にする必要はない。どれも「踊り」であり、「踊り」の作品を作るための要素だからである。

子どもたちはリズムカルな音楽を聞くと即興的に踊り出すことが多い。このときの「踊り」は自然で無意識な表出行動と呼ばれるべきもので、いかにおもしろい動きの形やリズムがあろうともそれを再現するのは難しい。「リズム運動（踊り）」を作るということは、出した動きを再現できるということである。「再現する」ためには意識して動きを出し、自分がどう動いたかを覚えておかなければならない。子どもにとって興味や関心があり、おもしろいと思う活動であれば「覚えておく」ことは難しいことではない。保育者がこの活動の意図をよく認識し繰り返し実践することで、この創造的身体表現活動は容易に展開できる。数

回の実践後、何か心に残った対象があれば子どもの方から「先生、こんな動きを作ったよ、見て見て。」と持ち込んでくる場面も度々経験した。

保育場面記録②の中の動きを出した後の「C1ちゃん、やってみて」という保育者の言葉は、子どもに再現を促すための働きかけの例である。それを見た他の子どもたちは保育者がよいと思っている動きのパターンを感じることができ、自分ももっとよい動き・おもしろい動きを出そうと工夫する。実際に動きながら、あるいは頭の中でイメージしながら、これならよいと思う「動きを決める」のである。「動きを決める」という意味は、このような自分で自分の作った動きを決める場合のほかにもう1つある。グループの作品として仕上げるために、みんなで動きを決めるという場合である。先ず、一人一人が出した動きを見せ合い、その中から最も題材に適したと思われる動きを選んで決めるのである。なお、その活動に伴って発生するグループワークや人間関係における諸問題に関しては、今後の課題としたい。

#### 〈動きを高める〉

出来あがった動きを人に見せようとする場合、どのような発表形態にしる必ず「練習」という活動は必要である。よく練習され、技術の高い動きはそれだけでかなりの表現力となる。教え込まれたのではない、「自分たちで作った動き」ならなおさらのこと「練習」は必要である。いかに素晴らしい動きをイメージしようと、それを表すための表現技術が伴わなければ見ている人には伝わらないからである。子どもたちが「自分たちで作った動き」をよく練習し舞台上生き生きと踊る姿は、それだけでも見ている人に感動を与える。作品としての内容が伴っていれば与える感動は更に大きい。発表後、見ている人からの高い評価が得られた時の子どもたちの満足感や充実感、何よりの次の表現活動への原動力となる。

もう一つの「動きを高める」の意味としては、練習しながらの「動きの手直し（改良）」である。動きは一応完成したが、みんなで練習していくうちに「動きの手直し（改良）」が必要となってくるのが普通である。「動きを決める」段階までの活動が順調に行なわれていれば、子どもたち

同士で話し合ったりアドバイスし合ったり、保育者に相談を持ちかけたりする場面がごく自然に現れるようになったことも、本研究を通して味わうことの出来た充実した経験である。

## V. 実践後の課題

様々な実践を経て、次に挙げるような課題が残された。

### 1) 選択する題材について

創造的身体表現ではあらゆるものが題材として挙げられるが、やはり身体表現の題材として適したものと向かないものがある。また、対象者の年齢や発育・発達、経験の度合いや環境などを考慮した題材の選択は重要である。次稿では失敗例なども取り上げて、幼児の創造的身体表現を育てるための適した題材についての検討を加えたい。

### 2) 作品構成について

「リズム運動」を作るといっても5・6歳児の段階では、数種類の短いフレーズのリズムパターンを作るのが精一杯である。子どもたちと相談しながらではあるが作品としての構成や形式を整えるのは、やはり保育者の仕事である。そのための適切な援助や作品構成の内容・方法については保育者としての知識や経験、あるいは感性も問われる重要な課題であり、これも次の検討課題としたい。

### 3) 伴奏音・伴奏音楽について

伴奏音や伴奏音楽があったほうが踊りやすいことは当然である。しかし、「音や音楽のリズム」と「動きのリズム」との関係など筆者らの間で未だまとめられていない課題も多い。引き続き実践を重ねながらの検討課題としたい。

### 3) その他

グループ活動としての課題は前述の通りである。また、身体表現活動以外の表現活動との関係については一部前述したが、「子どもの総合表現」の視点から、さらに検討を深める必要があろう。

## 謝 辞

本研究は、保育者を養成する機関である本学幼児教育学科の教員と保育現場の保育士とが共同で取り組んだものである。「生き生きとした子どもの姿」を目指して、保育現場の日々の活動を考慮しながらとは言え3年余りにわたる実践研究に多大なご協力とご支援をいただいた神郷町立保育園全職員の方々、並びに福祉行政の方々に厚く御礼申し上げたい。

### 〈引用・参考文献〉

- 1) 邦 正美・日本教育舞踊研究所「教育舞踊原論・舞踊カリキュラム」日本教育舞踊研究所 1973
- 2) 村浦とく他「子どもの表現力を育てる舞踊」明治図書 1988 pp.16-17
- 3) 石川博子編著「創作舞踊の理論と実際」黎明書房 1992 pp.22-29
- 4) 片山啓子 光本弥生『『創造的表現』を中心とした保育指導計画の作成Ⅰ』日本保育学会第50回論文集 1997
- 5) 片山啓子「幼児の創造的身体表現を育てる」新見女子短期大学紀要第18巻 1997 pp.23-28
- 6) 片山啓子 光本弥生 西村敦子『『創造的表現』を中心とした保育指導計画の作成Ⅱ』日本保育学会第51回論文集 1998

### 〈参考資料〉

- 1) 西村敦子他「生き生きと遊ぶ子どもを目指してー表現遊びを通してー」岡山県保育協議会保育所保育研究発表会資料 1998